

スージン^{グッー}小探訪

2012(平成24)年

金武町教育委員会

はじめに

本書を作成するにあたり、平成 21 年度から平成 23 年度にかけて金武町立中央公民館、金武町老人クラブ連合会、金武町教育委員会町史編さん・文化財係共催で「金武町の歴史・文化」と題した高齢者学級講座を実施しました。平成 21 年度には 65 名、平成 22 年度には 67 名、平成 23 年度には 70 名が参加し、普段、通り過ぎている場所の歴史や文化を再認識する機会となりました。町内のスージン小（細い路地）を歩き、現在の風景と昔の写真を見比べることで参加者らの思い出話も弾み、その中で伝承関係の確認調査を重ねてきました。

本書は、町内の歴史や文化にゆかりある場所の紹介とその場所を記した各区の地図から構成されています。この本を手にとり、これまでとは違う視点から、町内のスージン小を散策していただけるよう作成しました。本書が、郷土の歴史や文化に対する理解を深める一助としてご活用いただけることを願います。

末尾になりましたが、本書の記載内容を確認するため各区公民館にて最終確認調査を実施しました際、多大なるご指導ご協力を賜りました町内各区長および各区事務所職員、住民の皆様には篤く御礼申し上げます。

2012（平成 24）年 2 月

沖縄県金武町教育委員会

教育長 仲間 一

例言

1. 本書は、金武町の歴史と文化第6集『スージン小探訪』とした。
2. 平成21年度から平成23年度にかけて金武町立中央公民館、金武町老人クラブ連合会、金武町教育委員会町史編さん・文化財係共催で高齢者学級講座を実施し、その中で本書の内容を確認した。
3. 記載する伝承内容を確認するため、平成23年度には聞き取りによる最終確認調査を行った。
4. 調査体制は以下のとおりとした。
調査責任者 社会教育課長 仲田實
調査責任者 社会教育課主幹 伊芸誠
調査責任者 社会教育係長 仲間淳一
調査員 町史・文化財係主事 安座間充
調査員 町史・文化財係主事 仲間陽子
調査員 町史編さん嘱託員 武智方寛
調査員 町史編さん嘱託員 仲間文江
調査員 学芸嘱託員 金城忍
調査員 文化財調査嘱託員 岸本利枝
調査員 文化財係事務備人 屋比久美香子
5. 本書は仲間淳一・安座間充・仲間陽子・武智方寛・仲間文江・金城忍・屋比久美香子の共著によるもので、地図作成は仲間淳一・金城忍、表紙イラストは武智方寛・金城忍が担当した。
6. 主な執筆要領は以下のとおりとした。
●方言の表記はカタカナとした。
●各項目の横に地図中の数字を記載した。
●原則としてアラビア数字を用いた。
●参考文献名は『』で示した。
●本書では近世琉球にあたる時期を琉球王府時代と表現した。

謝辞

1. 平成23年6月から7月にかけての最終確認調査では、以下の方々にご協力及びご教示をいただきました。深く感謝申し上げます。
(五十音順記載)
【金武区】
伊芸武雄 奥間俊信 宜野座仙五郎
仲間勝男 仲間清一 前田真一
【並里区】
池原善光 池原弘 宜野座和夫
新里清 与那城剛
【中川区】
我謝憲勇 小橋川勝雄 仲間春子
仲間春子 知花安雄 屋比久孟三
伊芸信藏
【伊芸区】
安富祖清寿 安富祖トキ 池原政文
上江洲武久 上江洲徳幸 小波津進昇
瑞慶村智正 仲間安
【屋嘉区】
はがらか会の皆様
2. 本書の執筆及び編集に際して、町内各区長及び各区事務所職員の皆様に、情報提供、資料提供など特段のご配慮をいただきました。深く感謝申し上げます。
金武区長 渡慶次賀佑
並里区長 與那城直也
中川区長 宜志富司
伊芸区長 宜野憲一
屋嘉区長 伊藝菊博
3. 本書の内容を確認するにあたり、文化財保護審議会会長の池原隆氏に多くの助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

目次

金武・並里

ヤハズ	3	金武鎮魂碑	8	並里産業組合跡	13
ドンタン小	3	興亜会館跡	8	松岡政保邸跡	14
マーイ	3	カミサギ跡	9	ウフマシチャ	14
サータヤー跡	3	トゥムスズ御嶽	9	ウツカガー（金武大川）	14
伝一里塚	3	アナガー	9	ユーフルヤー	15
征露記念碑	4	大城孝蔵生家跡	10	ンジャトウマシチャ前のスンジヤ	15
金武のノロ墓	4	ノロ殿内	10	モーシヌ森	15
カーラヤーチの松林	4	勾玉・簪・古文書	11	イチチュグルマー	15
カラランダカリの宿道跡	4	金武産業組合跡	11	源仁商店	16
屋号マヌフスカの隣のスンジヤ	4	金武の鍛冶屋跡	11	カングラー	16
観音寺	5	ナーカムイ	11	當山久三生誕の地碑	16
屋号カララの隣のスンジヤ	6	ヘーシンバ	12	仲田徳三生誕の地碑	17
ウチンダカリのスンジヤ	6	アランマの浜	12	慶武田川（キンタガー）	17
池原の排水路	6	當山記念館	12	武田原	17
厚義館跡	6	當山久三像	12	オランダ森	18
金武グスク	7	忠魂碑	13	芳魂の塔	18
金和平跡	7	ウシナー	13	カンナーカのダキヤマ	18
金武節の碑	7	記念道路	13	茶川（サーガ）	18

中川

中川区	21	花城家	21	拓南訓練所	23
源原エイサー	21	花城家の仕明帳	22	県営開墾事業	23
エースプー	21	花城文兵とカタカシラ	22	中川校と源原校	24
源原の黒糖生産	21	ディーチュダギー	22	アンチモン鉱山	24
屋比久家	21	ヘーヤチガマ	22	ナコオガーのイズミ（名古川の泉）	24

伊芸

親王森	27	カミヤー	28	鴨川港	31
豊穡の大地碑	27	伊芸ヌルとヌールヤー	29	山里和尚の墓碑	31
川田原への集落移動のナゾ	27	伊芸の3つの御嶽	29	ヌール墓	32
ヤンガマタガー	27	伊芸の鍛冶屋跡	30	フシクブ	32
伊芸区戦没者慰霊碑	27	カミサギ	30		
ウブガー	28	伊芸のがじまる	30		
イズミー	28	ヌールヂー	31		

屋嘉

七日浜	35	ンナトゥンチャとフニクンジマツ	37	屋嘉の鍛冶屋跡	38
ヨリブサノ御嶽と底森御嶽	35	クラチャ屋敷	37	屋嘉のウフカー（大井戸）	39
メーダガー	36	フェーガマ	37	屋嘉の芸能衣裳	39
コサヌムイ	36	龜屋跡	37	屋嘉村の船遭難	40
ナカムイ	36	久高島の碑	37	屋嘉捕虜収容所跡の碑	41
ユンダガー	36	嘉芸小学校のあらまし	37	屋嘉節の碑	41
トゥンチガーとウフヤガー	37	マチシチャ小	38		



ヤハズ

地図番号 ①

現在のキャンプハンセン第1ゲート付近の地名。かつて、この辺りを宿道^{スウミチ}がとおっていた。宿道に沿って美しいナンマチュ（松の並木）がマーイ（馬場）まで続いていたといわれる。その様子は石川橋をわたりアランマの坂をのぼりきると金武ヤハズに出ると謡う古謡「金武口説」にもえがかれている。

ドンタン小

地図番号 ②

かつてマーイ（馬場）の南はじて現在は金武給油所そばの交差点である一帯は、ドンタン小と呼ばれていた。1903（明治36）年、第2回ハワイ移民出発に際し、金武世界石がここに建てられたといわれている。それ以来、海外移民出発の際には、この場所です別したという。

なお、金武世界石は戦後の道路拡幅工事に伴い、役場近くにあるタカトウイモーと呼ばれていた雄飛の森に移された。



戦前の金武世界石
（『金武町史 移民編』）



再建された馬場先の碑 戦後初期
（『並里区歴史写真集』）

マーイ

地図番号 ③

マーイ（馬場）は、ドンタン小から観音寺の間にあり、『沖縄県統計書 明治十三年』によると、長さ1.56町（約184m）幅10間（約20m）の場所である。このマーイがいつごろ造られたかは不明だが、琉球王府時代に始まったとされる原山勝負（農事奨励審査）の差分式（表彰と講評）の場所として使われたという。勝負のあと馬競争が行われたと伝わっている。

サータヤー跡

地図番号 ④

明治初期になると多く見られるようになったサータヤーだが、それ以前、金武には西塩汲原^{イリウスグミバル}の1ヶ所しかなかったという。マーイ（馬場）の東側には京組・寺武門組・内組・後組などのサータヤーがあった。マーイの松並木の下にはウージガラマツミと称されたキビの搾りかすを積んだ山があった。

1937（昭和12）年に大堂原に近代的な製糖工場ができたため、牛や馬がひく従来のサータヤーは姿を消した。

伝一里塚

地図番号 ⑤

琉球王府時代、王府と各地方の間切間の文書伝達^{しほくづぎ}を宿次^{しほくづぎ}といった。宿次のルートであった主要道路は宿道^{スウミチ}と呼ばれた。王府時代に調製された『正保国絵図』では、宿道沿いの一里塚が多数記載されており、県内のいくつかの場所ではそのあとが今も残っている。

かつて、このあたりで宿道を挟んで2つ向かい合うようにあった一里塚は、村道、県道の拡張によって南側の塚が先につぶされ、北側だけが残り、昭和初期まで残っていた。

征露記念碑

地図番号 6

1910(明治43)年、日露戦争で戦死した仲間清吉と新城朝則を祀るため、村長であった与那嶺三郎によって建立された。



征露記念碑

金武のノロ墓

地図番号 7

金武のノロを葬ったとされる。後年、関係者によって「ノロ墓」の墓標を立てられた。

ノロ墓改修に関して記録した古文書『明治三拾年のろくもい御墓所修繕入費割府入帳』は現在も大切に保管されている。

ノロ墓の隣に奥間門中の墓があり、その前で、戦時中亡くなった特攻艇豊廣部隊の兵士を火葬したといわれている。



金武のノロ墓

カーラーチの松林

地図番号 82

字金武瓦焼原に数十本松の木がはえていた。この地名は意味を表しているはすだが、この場所から瓦の破片など、その昔瓦を焼いた場所であることを示すものは見つからない。

1939(昭和14)年頃この松林に落雷があり、その後子供たちはここで草刈をするときには雷に注意するようにと厳しく親から言われたという。

カラランダカリの宿道跡

地図番号 84

かつて、宿道がカラランダカリをとっていた。屋号カララとその隣の井戸(スンジャ)の間を抜ける。



カラランダカリの宿道跡

屋号マヌフスカの隣のスンジャ

地図番号 87

字金武後村集に所在する井戸(スンジャ)で、大正時代に掘られた。深さが約30mあったので、井戸の底は暗くて、天気の良い日にしか見えなかった。最初は3世帯が使っていたが、のちにもう4世帯増えた。井戸さらいは、専門の人に頼むこともあったが、井戸を使う組の人々でやることもあった。



屋号マヌフスカの隣のスンジャ

観音寺

地図番号 ⑧

【1984(昭和59)年金武町指定文化財第1号】

日秀上人によって1520年頃創建されたと伝えられている。

有名な組踊『久志の若按司』では、
久志の山路分け出でて
行けば程なく金武の寺
お宮立寄り伏し拝み
南無や観音大菩薩
という一節が歌われる。

1934(昭和9)年の火事により焼失したが、後に村民の喜捨により再建された。それ以後、沖縄戦の戦火を免れ、今に残っている。県内でも数少ない戦前の寺社建造物である。

《沿革》

1520年頃 日秀上人が観音寺を創建する。

この間(時期未詳)、仏をまつことがおそろになりご利益が現れなくなったため、禅宗の寺へと改宗する。 『球陽』

1662年 禅宗から真言宗へ戻し、廃れた寺を修理し、屋根をカヤ葺とする。

『球陽』

1700年 改めて屋根を瓦葺とする。 『球陽』

1847年 フランス人宣教師が立ち寄る。

『評定所文書』

1853年 ベリー艦隊の乗組員、奥地探検の際、観音寺に立ち寄る。

1934(昭和9)年 火事により焼失する。

1942(昭和17)年 村民の浄財により再建する。

1945(昭和20)年 沖縄戦の戦火を免れる。

1984(昭和59)年 町指定文化財第1号となる。

1985(昭和60)年 修復工事がなされる。

《日秀上人》

真言僧。補陀落渡海で金武の福花に漂着し、金武観音寺を創建した。弥陀・薬師・観音の三像を作り護国寺に奉納、浦添経塚の妖怪退治、那覇の地藏堂の建立など多くの事績がある。琉球に約20年間滞在した後薩摩に渡った。

《観音寺のフクギ》

【1991(平成3)年金武町指定文化財第4号】

観音寺の境内にあるフクギで、推定樹齢は約350年である。沖縄本島各地にあるフクギと比較しても大きい部類に含まれる巨木である。



観音寺のフクギ

《梵鐘(旧天界禅寺鐘)》

【1985(昭和60)年沖縄県指定有形文化財】

1466年に造られた梵鐘で、首里の天界禅寺にあったもの。沖縄戦時に一時行方不明となるが、戦後金武の山中で発見され、現在観音寺で保管されている。



旧天界禅寺鐘

《日秀洞(金武鍾乳洞)》

観音寺境内に入口があるガマ。全長約1kmある鍾乳洞の一部で、金武公会堂の裏の入口ともつながっている。洞内には熊野権現を祀る金武宮がある。1963(昭和38)年に洞内に電灯や道が整備され、金武の観光名所となったが、現在では酒を保管する場所ともなっている。

《金武宮》

琉球八社の1つ。観音寺の境内に入口がある鍾乳洞の中に祀られており、本尊は千手観音である。琉球王府時代、琉球八社の7社までが王府から役俸を支給される神職が配置されたが、金武宮だけは観音寺の住職が管理していた。

1934(昭和9)年の観音寺の火災に関して、同年11月16日琉球新報に次の記述がある。

琉球八社中の名利金武観音寺(金武村字金武所在)は十五日午前十一時同寺の庫裡台所から発火し瓦葺住家二棟四坪、本堂五坪佛像もろ共全焼して午後一時鎮火した被害額三千元の見込

原因は住職仲田監道氏(二一)が午後九時半頃台所でお茶を沸かすために燃やした残火の不始末から遂に大事に至ったものである、



1934(昭和9)年の火事以前の観音寺(『金武町誌』)

屋号カララの隣のスンジャ 地図番号 23

字金武後村渠に所在する井戸(スンジャ)で、深さは約20mあった。干ばつになると水が少なくなり、濁ってしまうので、ウッカガーに水汲みに行くこともあった。道を隔ててイーチ(池)があった。現在は町営水道の水源地となっている。

ウチンダカリのスンジャ 地図番号 25

字金武後村渠に所在する井戸(スンジャ)。井戸の底は深く見えなかったという。夕方の水汲みの時間帯には、順番待ちが長くなるので、ウッカガーまで水汲みに行く人もいた。近くに2つのイーチ(池)があり、ウチンダカリのイーチとサムン小の隣のイーチと呼ばれていた。



ウチンダカリのスンジャ

池原の排水路 地図番号 31

『球陽』に池原の排水路造成の記述がある。

【現代語訳】今年(1833年)、金武間切の前の夫地頭と金武村の屋嘉筑登之らの功績を褒章し位を与える。

金武村の百姓地の池原の面積は33,660坪。そこは元来低い土地で、雨降りの度に冠水する。1830年、前の夫地頭、金武村の屋嘉筑登之、新里仁屋が村人26人を率いて池原から長佐久原に至る排水路を造成した。また、4つの溝を大田池原、那武喜志原に造成し水を流した。こうして長年荒れていた土地を耕作できるようになり、永く村の利益となるであろう。

『球陽』

厚養館跡 地図番号 26

1919(大正8)年頃、屋号アラカングーの伊芸文蔵が開業した旅館。瓦葺二階建てで、当時としては立派な建物だった。公務員をはじめ、本土からの駐在員、ときには外国人も宿泊した。文蔵亡き後は妻が経営したが、老年のため1934(昭和9)年頃廃業した。

金武グスク

地図番号 12

金武公会堂の裏手の上ヌ毛と呼ばれる丘陵（標高約 70 m）上に立地する、町内で唯一確認できるグスク。字金武後村渠に所在する。一帯で採集された中国産青磁などの輸入陶磁器から、時期は 14 ～ 15 世紀頃とみられるが、グスクの詳細な内容はよく分らない。金武グスクのほか、後村渠一帯では金武鍾乳洞（日秀洞）やアナガー、トゥムスズ御嶽においても、グスク時代（本土の鎌倉～室町時代）に外の地域からもたらされた陶磁器類や在地産の土器などが採集されている。

1942（昭和 17）年に金武区青年団が興亜会館を建設する前は、カミサギと区別するように大きな石が頑強に横一線になって南北方向に積まれていたという。現在では金武グスク門の石と伝わる石が公会堂前に保管されている。



中国産の青磁（トゥムスズ御嶽周辺）



金武グスク門の石



金武グスク

金武亭跡

地図番号 26

宇金武仲畑慶原にあった料亭。名護出身の与那覇定助が 1935（昭和 10）年頃に開業した。その後経営者の変更があったが、1944（昭和 19）年まで営業していた。

金武節の碑

地図番号 11

「金武節」

こばや 金武 こばに
竹や 安富祖竹
やねや 瀬良垣に
張りや 恩納

【意味】くばは金武で取り
竹は安富祖で取り
瀬良垣では竹を細く削り
恩納でクバ笠を仕上げた

金武を出発して安富祖、瀬良垣、恩納までの道のりをくば笠の製作工程になぞらえて歌っている。読み人しらすの金武節は、『屋嘉比工四』に記載されていることから考えると、18 世紀後半より以前に生まれたと思われる。歌碑は 2000（平成 12）年に建立された。



金武節の碑

金武鎮魂碑

地図番号 ⑬

この碑は、金武公会堂そとの洞穴入口にある。第22震洋隊の元隊員と遺族で組織されている金武会が、金武町民と金武区の協力のもと、1971(昭和46)年に建立した。金武町遺族会によって毎年慰霊祭が行われている。

第22震洋隊は1945(昭和20)年1月に金武に配備された旧日本海軍の特攻艇部隊で、隊員数は178名であった。震洋艇と呼ばれるベニヤ板製の小型船に250キログラム爆弾を積んで目標に体当たり攻撃を行った。部隊長は豊廣穂中尉(同年6月に大尉に昇進)で、豊廣部隊と呼ばれていた。部隊は興亜会館(現在の金武公会堂)と並里青年倶楽部(現在の並里区事務所)などを兵営とし、震洋艇は金武のメーヌハムの壕に隠されていた。



金武鎮魂碑



震洋艇 (沖縄県公文書館所蔵)

興亜会館跡

地図番号 ⑭

現在の金武区事務所の場所に、1941(昭和16)年頃、金武区青年団を含む金武区民全体のために建設された公会堂のこと。

建設資金はおもに、青年団の運営資金源であるセイネンヤーマ(青年山)の材木の売上金を充てた。材木の切り出し作業は、青年団の男女約100人が無料奉仕で行ったが、2ヶ月かかったという。また建設にあたっては、金武区の小学校3年生以上の男女が、砂運びを手伝った。

建設当時、戦争のため鉄筋に使用する鉄が入りできなかったため、設計者である大城龍太郎(金武区出身)の発案で竹を使用した「竹筋」コンクリート製の建物となった。1975(昭和50)年、現公会堂建設のため取り壊す際に、大城龍太郎らが確認したところ、「竹筋」は朽ちて無くなっていたという。



興亜会館と戦後増築された金武区役所

《青年山》

現在はキャンプハンセンの中にあるウシヌマータと呼ばれた場所には、かつて青年団が運営資金を捻出するため字から割り取られた山があった。青年団はこの場所にイヌマキを植林していた。

カミサギ跡

地図番号 19

カミサギとは、神を招いて祭祀を行う場所をさす。軒の低い祭祀用の建物もそう呼ばれるようになった。今はなくなってしまったが、現在の金武区事務所北にあった。18世紀に琉球王府が編さんした『琉球国由来記』には「金武村」の「神アシアゲ」について記されている。

かつては、枝ぶりの良い老松が生えていて、素晴らしい景観であったという。また夜になると青年たちが集まる場所のひとつで、青年たちはサシイシと呼ばれる石を持ち上げるカくらべをしたり、角力を取ったりしていたという。

金武の綱引きは、仲間村渠と京村渠にわかれて行われるが、カミサギは仲間村渠の綱打ち場であるとともに、綱引きの行われる会場でもあった。

神アシアゲ 金武村

稲穂祭之時、五水四合、花米一升八合（両総地頭）シロマシ四器、麦神酒六、肴一器（百姓中）

同大祭之時、五水四合、花米一升八合（両総地頭）神酒八、肴一器（百姓中）

柴指之時、神酒六（百姓中）供之。

同巫・居神ニテ、祭祀也。

『琉球国由来記』



カミサギあたりの風景 戦後（『金武区誌 戦前編』）

トゥムスズ御嶽

地図番号 22

【1994（平成6）年金武町指定文化財第14号】
トゥムスズ御嶽は役場の南西約150m、標高約70mの石灰岩丘陵に位置する。グスク時代～近世の部落形成期の遺物が出土している。

戦前までは、屋号ユースを中心に近隣の人々が、部落繁栄と豊作を祈願して、旧暦の1月16日にヒーマーツノウガン（火祭の御願）を行っていた。

『琉球国由来記』に「トムツツイベ」、「神名シマネドミ」と記されている由緒ある御嶽である。

トムツツイベ 金武村

神名、シマネドミ

稲大祭之時、仙香、花米九合、神酒二器、同村（百姓中）供之。金武巫ニテ祭祀也。

右三箇所、金武巫崇所。

『琉球国由来記』

アナガー

地図番号 20

かつて、金武公会堂前の広場に規模の大きい陥没ドリーネがあった。その底にはカーがあり、1976（昭和51）年にドリーネは埋め立てられたが、カーは保存されている。地下には全長約180mの洞窟があり、大人が立って歩くことができる大きさである。

洞窟の入口近くに水を汲む場所があるが、シーブタブタという妖怪が住んでいると言われていて、水汲みに行く子供に恐れられていた。

沖縄戦の時には、住民の避難場所となり、空襲警報が鳴るたびに近所の人々が避難していた。旧正月には、特定の門中が拝みを行っている。

大城孝蔵生家跡

地図番号 ④

大城孝蔵は1881(明治14)年現在の金武区で生まれた。金武小学校に入学し、上級生時代には教員であった當山久三と、下級生たちの髪を切ったというエピソードがある。1902(明治35)年沖縄県立中学校を卒業し上京後、當山が募集したフィリピン移住地視察のため、初のマニラ移民より先に渡航し、現地では監督とよばれた。

1905(明治38)年兵庫県出身の太田恭三郎らと、ダバオで麻栽培を始めた。大城が総監督として開墾したバゴ地域は、のち「バゴ・オオシロ」という地名となった。1907(明治40)年太田らと太田興業株式会社を設立した。1918(大正7)年ダバオ日本人会の初代会長に選ばれた。さらに重労働であった麻ひき作業の機械化を目指して、1920(大正9)年ハゴタン(動力麻ひき機)を完成させ、生産高を急増させた。1935(昭和10)年ダバオの上原旅館で急死した。

1938(昭和13)年那覇の開洋会館に銅製の胸像が、同じ頃、金武では石膏製の全身像が建立されたが、いずれも残されることはなかった。2004(平成16)年沖縄のフィリピン移民100年を記念して金武区上又毛に銅像が建立された。



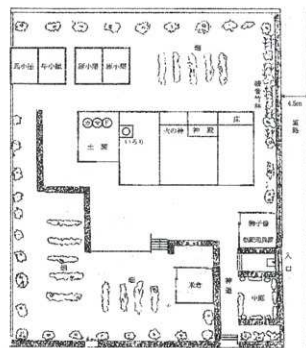
戦前の石膏像の除幕式(『金武区誌 戦前編』)

ノロ殿内

地図番号 ⑥

ノロ殿内とは、ノロ火の神のある家、あるいはノロ火の神の祀られている祠などの名称。金武ではヌヌチまたはヌンドゥルチと呼んでいた。1980(昭和55)年、ノロ殿内は里山の管理団体である金武共有権者会に譲渡されることが決定、1981(昭和56)年現在の建物となった。

ノロ殿内には2体の火の神があり、それぞれ3個の石をかなえの形に配置されていた。そのうちの1つは、祭祀の時に煮炊きをするカマドとして使われたという。



改築前の金武ノロ殿内平面図(『金武区誌 戦前編』)



改築前の金武ノロ殿内(『金武区誌 戦前編』)

勾玉・簪・古文書

地図番号 15

【1992（平成4）年金武町指定文化財第11号】

金武ノロに代々引き継がれてきた勾玉・簪・古文書が町の文化財に指定されている。琉球諸島では、勾玉とはノロ以上の神女たちが首に下げた祭具のことで、金武ノロのものは、勾玉大小2個・水晶玉93個・ガラス玉3個が数珠状につながれている。簪は2点あり、1点はべっ甲製、もう1点がガラス製で珍しいものである。古文書は5冊あり、いずれも修復がなされている。



勾玉・簪・古文書

金武産業組合跡

地図番号 16

1906（明治39）年無限責任金武間切販売購買組合が設立され、1922（大正11）年に解散された。その後、有限責任金武信用販売購買利用組合が購買・販売・信用の事業を主な目的として設立された。おもな3事業のほかにも、製糖工場・精米所・理髪店を経営していた。金武では、「サンジュクメー（産業組合）」と呼ばれた。

初めは現在の金武区青年会館の場所にあったが移転し、1927（昭和2）年に現在のJAおきなわ金武支店の場所に移った。戦時中の国家統制により、1943（昭和18）年に解散となった。

金武の鍛冶屋跡

地図番号 9

金武区の鍛冶屋は屋号カンゼクを中心に営まれていたようで、一族のカンゼクン小もかつては鍛冶屋であったと言われている。カンゼクはイーチヌモーの松の木の下で鍛冶屋を営み、戦後の一時期まで、農具類の製作や修繕を行っていた。



松の根元にあるのが鍛冶屋（『金武区誌 戦前編』）

ナーカムイ

地図番号 16

『琉球国由来記』にも記載されている御嶽。1897（明治30）年の金武小学校敷地造成以後、御嶽原にも人家が建つようになったので、散在していた香炉がナーカムイとヘーシンバに集められた。現在は、ハワイ帰りの奥間嘉吉によって1952（昭和27）年に寄進されたコンクリートの台座に複数の香炉が置かれている。

中森 二御前 金武村
壹御前、神名、タケノコホツカサノ御イベ
壹御前、神名、ヨンサノツカサ御イベ
右二ヶ所、毎年、三八月、四度御物参之有祈願也

『琉球国由来記』



ナーカムイ（『金武町誌』）

ヘーシンバ

地図番号 10

ヘーシンバ
拝神場は1897(明治30)年金武小学校の敷地造成のため、従来散在していた香炉を移動させた場所。それ以前の御嶽原はうっそうとした原生林だった。屋号ウガミンニの先祖が唐旅(中国への旅)から無事に戻ったことから、唐から持ち帰った石を香炉としたという伝承がある。

敷地には、町の天然記念物に指定された樹齢約80年のアコウの巨木があったが、1996(平成8)年台風により倒れ、のち指定解除となった。



拝神場のアコウ 1994(平成6)年



ヘーシンバ(『金武町誌』)

アランマの浜

地図番号 60

アランマの浜付近で大和船が難破した記録が1857年の『評定所文書』に記されている。

四月中日記 目録

一与那城間切江漂着之大和船逢嵐金武間切於あかんま浜破船二付、数ヶ条之事。

五月中日記 目録

一金武間切あかんま浜二而破船之大和船船頭・水主共宿主江賃米被成下度、那覇役人より問合、返答并御物奉行江通達之事。

『評定所文書』

當山記念館

地図番号 69

1935(昭和10)年に完成した鉄筋コンクリート平屋。海外移民の寄付により建てられた。金武区出身の建築家である大城龍太郎の設計である。丸窓や円形の天井などモダンなデザインがとりいれられた。移民教育の場として活用された。



當山記念館(『金武町史 戦争編』)

當山久三像

地図番号 60

1931(昭和6)年にアメリカ在住の沖縄県人たちの寄付をもとに建立された。銅像建立の発案者は松岡政保であった。アメリカの自由の女神像をヒントに、海外雄飛のシンボルとして當山の銅像を那覇港に建立しようとしたが、諸事情により現在地に建立された。

1944(昭和19)年金属回収令により銅像は供出されたが、1961(昭和36)年に像は再建立された。



銅像供出後の台座
(『金武町史 戦争編』)



當山久三像
(『金武町誌』)

忠魂碑

地図番号 41

満州事変や日中戦争で金武村出身者から戦死者が出たため、1936(昭和11)年に建立された。忠魂碑は各市町村に建立されていたが、戦後その多くが取り壊され、今に残るものは数少ない。忠魂碑には揮毫者である陸軍大將鈴木庄六の名が刻まれている。在郷軍人が招魂祭のため訪れたといわれている。

ウシナー

地図番号 43

一帯はくぼ地となっており、明治の末頃に闘牛場が整備されたと思われる。1913(大正2)年11月23日、並里青年倶楽部落成祝の余興として闘牛大会が行われた記録がある。

並里のウシナーがない以前、村の行事のすべてはマーイ(馬場)で行われていたが、その後はウシナーが主たる会場となった。

かつて、周囲には大きな松の木がうっそうと繁っていたが、今では昔を偲ぶすがはどこにも見当たらぬ。



1962(昭和37)年の角力大会 (『並里区歴史写真集』)

記念道路

地図番号 42

大正天皇の即位を記念して1915(大正4)年に作られた道路で、幅は約15m、長さは約200mあった。中田徳三が監督となり、青年会の若者が道路工事に参加したという。道路沿いには雑貨店や旅館、歯科医院などが並んでおり、賑やかな場所であった。戦時には、出征兵士の壮行会が行われる場所であった。



1935(昭和10)年頃の記念道路 (『並里区誌 戦前編』)

並里産業組合跡

地図番号 47

正式名称は有限責任並里信用販売購買利用組合であるが、「サンスクメー」の愛称で呼ばれた。1922(大正11)年の開設当初は屋号イチバルジの場所にあったが、店舗敷地が手狭なことから、また事業拡大のため、ウッカガーの上へ移転した。当初は購買事業を主としたが、信用・販売・利用と事業を広げていった。またウフマシチャに農業倉庫や精米所、記念道路沿いに支店(ウィヌクミエ)と肉販売所を設けて、組合員の便利をはかった。

これらの活動が県に認められて、1934(昭和9)年経営研究組合の指定を受けたため、他組合による視察研修が絶えなかったという。1943(昭和18)年戦時中の国家統制により組合は解散された。



ウフマシチャの産業組合の倉庫(左) (『並里区歴史写真集』)

松岡政保邸跡

地図番号

39

松岡政保は、1897（明治30）年父宜野座政太郎、母カナの四男として生まれた。屋号はクシミーヤン小である。15歳で父の呼寄せによりハワイに渡り、その後米国本土に渡ってインディアナ州にあったトライステート大学を卒業した。



松岡政保（『金武町誌』）

1936（昭和11）年に帰国して沖縄製糖会社の技師となった。戦後は沖縄諮詢会幹事兼工務部長・民政府工務部長を経て、1953（昭和28）年に松岡配電会社を設立、1964（昭和39）年琉球政府行政主席となり、就任にあたり「私が最後の任命主席になる」と言明し、幾多の布令布告を民立法に改め、その政治力で自治権の拡大に努めた。1989（平成元）年4月7日、93歳で逝去した。

ウフマシチャ

地図番号

34

産業組合、区事務所、青年倶楽部などが立ち並び並里の中心で、大きな松の木があったことから「ウフマシチャ（大松下）」と呼ばれた。あたりには産業組合の農業倉庫や精米所もあった。並里の綱引き・村遊び・生年祝の行われる場所として人々に親しまれた。



ウフマシチャ（『並里区歴史写真集』）

ウッカガー（金武大川）

地図番号

36

【1992（平成4）年金武町指定文化財第8号】
多孔質の琉球石灰岩基盤から湧き出た代表的な井泉。もともとはウッカー（ウフカー）という。県内でも有数の湧泉で、『金武町の井泉』によれば30年前には1日に3,600トンの湧水量をほこったが、のちに1日1,000トン程度に減ったという。

1924（大正13）年昭和天皇御成婚記念事業として整備された。資材費1,600円は金武・並里両区で負担し、青年男女が1人あたり10日間ほど労働奉仕した。金武で最初のコンクリート構造物であった。

昔、ウッカガーで水を汲むのは小学校高学年生の仕事で、朝2〜3回水汲みをしなければならなかった。金武区の人々はウッカンバビラの急坂を上らねばならずウッカガーで水を汲み運ぶのに苦労していたという。



ウッカガー 昭和初め頃（『並里区歴史写真集』）



ウッカガーの洗い場（『並里区歴史写真集』）

ユーフルヤー

地図番号 43

かつては各家庭で湯を沸かし入浴していたが、1895(明治28)年頃から那覇にユーフルヤー(銭湯)が開業され、その後地方にもユーフルヤーが出来ようになった。

明治の終わりに頃ウッカガーで開業したのが並里のユーフルヤーの初めといわれているが、間もなく廃業となった。その後、区民の強い要望で区経営のユーフルヤーが運営されることになった。1944(昭和19)年当時の入浴料は大人が5銭、小人3銭であった。



ユーフルヤー 1960(昭和35)年頃(『並里区歴史写真集』)

ンジャトゥマシチャ前のスンジャ

地図番号 41

屋号ンジャトゥマシチャの前にあった井戸(スンジャ)。周囲の十数世帯が使っていた。約21mほどある深い井戸だったので、水を汲み上げるのに苦労したという。当初の井戸は、滑車は木製、縄はシュロ製、井戸枠は4個の石を加工して円形に組んだものであった。滑車は昭和初期に金属製へと変わり、井戸枠は1953(昭和28)年頃にコンクリート製となった。



ンジャトゥマシチャ前のスンジャ

モーシヌ森

地図番号 45

屋号モーシの前に位置することが名称の由来。現在ある松は1935(昭和10)年頃に当時の青年会が植樹した。かつて村の女性達が臼太鼓(フツエウ)を練習する場所でもあった。

現在のゲートボール場辺りはかつて窪地で、湧泉(ヌンドゥルチガー)があり、戦前まで金武ノロが正月にアナガー、ティーラガーとともに拝む場所であった。

付近にヌンドゥルチヤーシチという地名があるが、ヌンドゥルチ(ノロ殿内)が存在していたのか、もし存在していたとしたら、実際にどのような建物であったのかはわからない。

イチチュグルマー

地図番号 42

五つの道路が交差する場所で、並里の集落と周囲の田畑とをつなぐ交通の要であった。

カジマヤー(97歳の祝い)を迎えた人は、風車をトゥイキ車(人間が引っ張る荷車)に飾り付けて道ジュネーを行ったが、そのときに通る場所の一つであった。

近くには牛馬を使う旧式のサータヤーが2か所あった。サータヤーのために掘られた池もあり、イチチュグルマーのイーチ(池)と呼ばれていた。

周辺には美里原遺物散布地があり、遺物が確認されている。



イチチュグルマー

源仁商店

地図番号 43

1922(大正11)年頃、ハワイ帰りの仲田源仁が開店した雑貨店。当時珍しかった二階建ての瓦家で、一階部分が店舗となっていた。金武では大手の雑貨店であり、宜野座や恩納からの顧客も多かった。

店の宣伝用に集落内に立てた看板には「なんでも ないものは ない 源仁商店」とあり、「なんでも商品は揃っています」という意味と「商品はみんな揃っていません」という意味の両方に取れるということになったという。



源仁商店 大正の頃(『並里区歴史写真集』)

カングー

地図番号 48

大正の初めころ掘られた湧水で、昭和初期にコンクリートで整備された。雨が降ると水が濁ったが、並里の集落の東がわにあるンジュイダカリ一帯に住む人々はここで水を汲んだ。隣にはムーアレグムイ(芋洗小堀)があった。2000(平成12)年コンクリートが崩落したため、並里区が従来の形状にあわせて新たに整備した。

當山久三生誕の地碑

地図番号 44

當山久三は1968(明治元)年11月に屋号ウフヤで父政助、母ウシの3男2女の長男として生まれた。金武小学校を第1期生として卒業した。師範学校初等科で学び、のちに羽地尋常小学校や金武尋常小学校の訓導、その後並里の総代(区長)となった。

1899(明治32)年、第1回ハワイ移民を送り出し、1903(明治36)年、第2回ハワイ移民では自らも渡航、6ヶ月間現地に滞在して移民の状況を視察した。これらの成功から「移民の父」として称えられるようになった。1904(明治37)年フィリピン移民にも関与した。

その後、金武村の初代村会議員となり政界へ入る。1909(明治42)年、第1回県議員に最高得票で当選して政治家としての将来を囑望されたが、翌年、与那原の自宅で病氣のため逝去した。享年42歳10ヶ月であった。



當山久三生誕の地碑

仲田徳三生誕の地碑

地図番号46

仲田徳三は、1868（明治元）年8月5日、屋号トクモシーの長男として生まれた。金武小学校のちに師範学校を卒業して教員となる。その後、金武間切長、初の村会議員、初の県会議員などを歴任した。1920（大正9）年国頭郡選出の衆議院議員となる。1924（大正13）年56歳で任期を満了した後は、金武の発展のため先頭に立って活躍した。1962（昭和37）年9月17日、94歳の高齢で他界した。

生誕の地碑は1993（平成5）年、生前の功績を讃えて建立された。



仲田徳三（『金武町誌』）

慶武田川（キンタガー）

地図番号47

【1991（平成3）年金武町指定文化財第5号】並里集落の南東にある大きな湧水。夏場でも溢れることはなく水量は豊富である。昭和初め頃に現在のかたちに整備された。

飲料水を汲むほか、洗濯や芋洗いの場所として利用されていた。水浴び場があり、子供たちが泳ぎを覚える場所でもあったという。以前はこの水を利用して、もやし作りも行われていた。並里のいくつかの門中が拝んでいる。



慶武田川（キンタガー）

武田原

地図番号48

武田原は、金武・並里の地割地で、金武・並里の人々にとって共通の農耕の場所であった。地割地とは、琉球王府時代に行われた地割制にもとづいて、農民たちに割当てられた土地のことである。

雨が降ると周囲から流れ出る雨水が武田原に集中し、排水も悪かったため、実った稲が水没することが度々あった。そこで1897（明治30）年金武間切最初の間切長伊芸金次郎（字屋嘉出身）は、並里総代當山久三と共に2本のウフンジュ（大溝）を掘り排水を良くした。工事は金武・並里の住民総出で行われたという。1本はウッカガーなどの湧水、もう1本はキンタガーなどの湧水から流れ出た水が通っていた。

毎年7月ごろに行うウフンジュサレーという作業では、ウフンジュの草刈りや土さらいをした。金武と並里の共同で行うスーンジブー（総出賦）であった。スーンジブーとは、各世帯から1名ずつ参加して、村事務所の計画する諸作業に従事することであった。作業の日時が決まると、村の佐事（小使い）が「スーンジブードー」と声をかけながら集落内を回った。作業当日、集合時間が近づくと、ドラを叩いて人々に知らせた。並里で行われるスーンジブーは、ウフンジュサレーのほかに田植え前のウッカガーやキンタガーの溝掃、道路の補修、側溝や排水路の補修などがあつた。



マチュラ（現在の農業用水のタンクのあたり）から武田原を望む景観。ウフンジュは中央。（『並里区歴史写真集』）

オランダ森

地図番号 38

1853年、ペリー司令長官率いるアメリカ東インド艦隊は、日本に來航する直前に琉球に寄港した。当時、琉球の人々は欧米人を「ウランダー」と呼んでいて、ペリー艦隊の乗組員らが金武を訪れた際ゆかりのあるこの場所がオランダ森と呼ばれるようになった。

1917(大正6)年金武と与那原を結ぶ発動機船「金武丸」の就航祝賀会がオランダ森の麓の広場で行われた。余興としてエイサーなどが披露されたという。

松岡政保の像は、旧沖縄民政府工務部会の発起により、金武村(当時)と賛助者の協力で建立された。1971(昭和46)年8月8日オランダ森で行われた除幕式では、屋良朝苗行政主席やランバート高等弁務官をはじめ約300人の参列者が集まった。



銅像の除幕式 1971(昭和46)年
『金武町郷友会 結成45周年記念誌』

芳魂の塔

地図番号 40

1971(昭和46)年に建立された慰霊碑。日露戦争から第2次世界大戦までの戦没者約800柱が祀られ、毎年6月に慰霊祭が行われる。



芳魂の塔

カンナーカのダキヤーマ

地図番号 39

字金武宮城原(フツコノハラ)にあり現在の葬祭場から北側の崖一部とその崖の下一帯をさす地名で、立派な竹が生えていたカラダキシ山であった。ここは屋号カンナーカの所有となっていて、カンナーカ以外の人が取ることはできなかった。崖下には田んぼもあったという。

茶川(サーガ)

地図番号 41

【1991(平成3)年金武町指定文化財第6号】

サーガの水は、多孔質の琉球石灰岩をとおり湧き出ている。透明度が高い水である。

水道が設置される前、ンジュイダカリや美里原の人たちの洗濯・水浴・水汲みの場所として1963(昭和38)年頃まで利用されており、人々の生活と深い関わりを持っていた。サーガの豊富な湧水は福花原の水田を潤していたという。現在はウナギ養殖場の水源地となっている。



茶川(サーガ)